

<図書紹介>

岡田英弘編『別冊 環⑩ 清朝とは何か』

(藤原書店, 2009年5月, 335頁, 3990円)

山田美保*¹

清朝は単なる「最後の中華王朝」などではない, というのがこの書の主張である。チンギス・ハーンより北元に伝わる天命を受けた「モンゴル帝国の継承国家」, 満洲人の支配する帝国「アイシン=ギョロ朝」, 16世紀半以降に見られた人的・物的交流の活発化(特に銀を介した世界的交易ブーム)から勃興し, 17世紀半の沈静化に対応した「近世」国家の一つ…計15名という執筆者によってそのイメージは様々であるが, 満・蒙・蔵・羅・露・日などの非漢文史料も用い,

時間的にも空間的にも「国民国家史観」を超えんとする問題意識を持った研究者達の成果がコンパクトに紹介されている。切り口も政治史, 制度史や外交史ばかりでなく貨幣史, 科学史など多岐にわたる。清朝滅亡後の情報も載せられ, 現中華人民共和国の抱える民族問題を考える際にも有用である。近現代史を重視する, あるいは日本史と関連づけた世界史教育を行おうとする方には特に一読を勧めたい。

高井ジロル編著『Globes -地球儀の世界』

(ダイヤモンド社, 2009年3月, 157頁, 1800円)

丹治達義*²

地球儀は, 地理学習や社会科学習で不可欠の教具だが, 現在日本で確認できる50の地球儀を紹介したのが本書である。すべての地球儀について写真を掲載し, その特徴の紹介文を見開き2ページでコンパクトにまとめ, 環境・バリアフリー・ハイテク・歴史的・スタイリッシュ・ゴージャス・ユニーク・地球外の8章に分けて紹介している。

単に地球儀と言っても目的や使用方法に応じて, 様々なものがある。例えば環境問題の理解や海

底地形の理解のための地球儀や, サッカー情報地球儀, ビーチボール型や360度回転可能など, 登場する地球儀は実に多彩だ。特筆すべきは一章を割いて, 視覚に依拠しなくてもよい, バリアフリー地球儀の紹介を行っていることである。また地球儀の制作過程や地球儀用語にも触れ, これほどまでに地球儀にこだわって, 多角的かつ網羅的に取り上げた書物は初めてだろう。社会科教育に関わるすべての方に, 基本的な書物として一読を勧めたい。

*1 都立深川高等学校

*2 筑波大学附属視覚特別支援学校